日本史のルネサンス
網野善彦の作った楽園

奥村克行1)2), 松岡尚則1)3)
1)公益財団法人　研医会, 2)東京武蔵野病院, 3)東邦大学東洋医学研究所

はじめに

- 網野善彦の日本史研究は網野史学と呼ばれ、日本史学に影響を与えた。
- 事件史や政治史中心だった従来の日本史の重心を社会史の方向にシフトさせた。
- 歴史研究の方法や日本史の記述方法を変化させた。
- 網野の生涯と業績を紹介し、その創造性について考察する。

網野　善彦（1928年 - 2004年）

- 歴史学者。専攻は中世日本史。
- 名古屋大学文学部助教授、神奈川大学短期大学部教授、同大学経済学部特任教授を歴任。
- 日本史だけでなく多くの分野に影響を与えた。

山梨県生まれて幼少期に上京、旧制東京学校、東京大学卒業。

網野善彦の仕事

- 「非農業民」の社会を発見し、稲作農業を中心に語られてきた従来の日本史の常識を覆した。
- マルクス主義歴史学を相対化する新しい理論を提示した。
- 人口統計の過誤、アジール論など新しい視点を導入し、研究を活性化させ、社会史学を発展させた。
- 民俗学や考古学など多様な分野を取り入れ、資料研究に公的文書だけでなく絵巻物や疑書、襖の下張り等の私的文書を用いるなど資料学に変化をもたらした。
- 聖性、差別、分業、貨幣、交換、金融など13世紀の転換における技術、自然、人間と社会の変化を示し歴史区分に新しい見方を示した。

網野善彦の影響（1）

- 著書多数、『無縁、公界、楽』などヒット作もあり、専門家のみならず一般読者にも広く読まれる。
- 一般への影響（1）

宮崎駿：アニメ映画　『もののけ姫』

網野善彦の影響（２）

- 一般への影響（2）

隆慶一郎：時代小説、漫画、演劇
『吉原御免状』『影武者徳川家康』『一夢庵風流記』など

京極夏彦：ミステリー小説
『姑獲鳥の夏』『魍魎の匣』など

- アジール論など1980年代に流行した現代思想などにも影響を与える。

年譜（1）

- 1928年　山梨県東八代郡で地主の末男として出生、幼少時より上京、東京で育つ。

  地主の一族で曾祖父は網野銀行の創業者。父は事業で東京に出て石油会社を作ったが結核で療養生活をしていた。1935年 6歳で白銀小学校入学。

- 1940年 （12歳）　旧制東京高等学校入学

  中等科時代は級長など務めた。1945年、仲間と歴史研究会を作り、戦後の新しい日本史学と出会い、進路を決める。

- 1947年 （19歳 ）　東京大学文学部国史学科に入学

  学生運動に熱中、民主主義学生同盟副委員長兼組織部長を勤める。

- 1950年 （22歳） 渋沢敬三の日本常民文化研究所に勤務

  共産党の国民的歴史学運動に関わるが1953年に運動から脱落。

年譜（2）

- 1955年 （27歳） 常民文化研究所分室がなくなり、1年の無職を経て都立北園高等学校に勤務。

  部落解放研究会顧問を務めるかたわら、東京大学史料編纂所に通って古文書を筆写、66年に『中世荘園の様相』を上梓

- 1967年（ 39歳） 名古屋大学文学部助教授

  1974年 （46歳） 『蒙古襲来—転換する社会』発表

  13世紀の転換など歴史区分を社会史から見る視点を導入

  1978年 （50歳） 『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』

  無縁説など日本史学に新しい学説を提示

- 1980年 （52歳 ）神奈川大学短期大学部教授

- 2004年 （76歳） 肺癌で他界

日本史学の背景

- 戦前　皇国史観

  日本の歴史を〈国体〉の顕現･発展としてとらえる歴史観。1930年代半ばから全盛となり敗戦とともに衰退する。天皇機関説や津田左右吉事件など学問に干渉した。

- 戦後　マルクス主義歴史学

  敗戦と同時に戦前に論文を発表できなかった学者たちが論文を発表、マルクス主義者が多く、戦後の歴史学の大きな潮流となる。

  石母田正『中世的世界の形成』、安良城盛昭の太閤検地の研究など

- マルクス主義歴史学から実証主義へ

  マルクス主義史学が全盛となる中で、思想や政治とは距離を取った実証主義的な研究が佐藤進一、石井進、笠原宏至、勝俣鎮雄などにより行われ、後に大きな流れとなる。

網野史学の特徴

1. 「日本」という国号の意識化（「日本」の相対化）
2. 「非農業民」という範疇の提示（「百姓」の相対化）
3. 「無縁」「公界」「楽」の提示（単純な発展史観の克服）
4. 天皇制の執拗な追求（天皇の相対化）
5. 東国・西国史観の提唱（単一民族説の克服）
6. 海からの視野の提唱（「島国」観の克服、国境の相対化）
7. 歴史を貫徹するものへの絶えざる関心（「民俗的特質」の解明）

桜井英治　網野史学の超え方—新しい歴史像を求めて　2003年

遍歴する非農業民の世界

- 山野河海やアジールなどを遍歴する非農業民の世界。
- 大きな権力や定住し水田耕作する農業民を中心とする史観から、周辺、脱中心化としての多様な職能民の世界を歴史学に導入した。

日本史の資料集

日本史の見直し

- 百姓は農民と同義ではなく多数の非農業民も含む言葉だが、百姓を農民と同義とし、非農業民を水呑百姓として貧しい小作人と考えたことで日本史学に誤りが生じた。
- 養蚕、機織り、漁業、林業、製塩、製鉄などが江戸、明治を通じて、徐々に農業という言葉に含まれていった。
- 多数の非農業民が住む都市が近世、村と呼ばれ、明治以降は農村と分類されたため誤解が生じた。
- **水田一元史観の見直し**
- **言葉の定義や江戸時代の人口の7-9割が農民であるとする常識の誤り、従来の歴史学の再検討が必要。**

資料論の転換、学際的研究

- 文献だけではなく、絵画資料や考古学の資料から歴史を読み解く
- 公的文書からは見えてこない歴史や社会、襖・屏風の裏張りや偽書等の私的文書から歴史を掘り起こす
- 民俗学などとの学際的研究

宮本常一（1907-1981）
民俗学者。忘れられた日本人などの著作がある。
網野と同じ渋沢敬三の民俗学研究所に所属。
網野善彦の著作に『宮本常一『忘れられた日本人』を読む』がある。

政治史、事件史から社会史への転換

- 13世紀の転換点：貨幣、交換、聖性、蔑視など、価値観の転換→事件や制度などの政治的変化からでは分からない民俗、社会のありようの変化を示す
- 表舞台に出にくい民衆の歴史、ネットワーク、悪党や海賊と呼ばれた人達、時代の規範に外れた人々、時代倫理に合わないと見られた人々の私的資料は公的文書と異なり失われやすい。
- 資料が残りにくいため認識されにくい社会の側面を、山野河海やアジールを通して研究する

日本列島の多様性

- 中世の統治制度における西と東の相違。

  東国　→　イエ支配に基づき領主が領民に縦に結び付いた家父長的な主従連合で、西洋史的な封建制に近い。

  西国　→　イエが横に連合したムラ的結合で、荘・保の神社の宮座の組織に支えられた座的結合で、東アジア的

- 日本の国号問題と絡めて、民族や国家の同一性批判へ繋がる。

ネットワークから見る歴史学

- 田畑のない山村、津、小島などの豊かさから、水域を障壁としてみるのではなく、自由に往来、流通できる通路としてとらえる。

- 交通、交易の国境を越えたネットワークの存在

- 商業、流通、金融などにおける天皇や寺社との関係

移動、交易の通路としての海

アジール

- 歴史的・社会的な概念で、「聖域」「自由領域」「避難所」「無縁所」などとも呼ばれる特殊なエリアを意味する。歴史的には、当初は統治権力は存在せず、全ての場所がアジールであった。統治権力が支配領域を広げて多くの場所が統治権力の支配下となった後も、支配を受けない場所が、とびとびに残された。アジールには、神社、仏閣などの宗教的聖地や、市場など複数の権力が入り混じる自由領域・交易場所などがあった。商業都市も、「自治都市」として強いアジール性が認められた場合がある。アジールは、大きな統治権力から見た場合に力が及ばない好ましくない場所であったため、否定され支配していった結果、徐々に狭められていった。

近代におけるアジール、ニューヨークの精神病院(アサイラム)

無縁、公界、楽　―無縁の原理―

- 有縁、有主の歴史法則→所有、生産、階級の関係や、剰余価値による社会の段階的進歩で説明される唯物史観
- 無縁、公界、楽→人やものが、現世の縁や所有、世俗的な支配や統治権力から離れて自由に行きかい、交換や関係を結ぶ、資本主義的な場所
- 無縁説→交換、貨幣、金融、商業、分業などの資本主義的要素は歴史の進歩により生じたのではなく、人類史の初めより形を変えつつも存在した基本的な法則
- 政治や制度などの縦糸では読み解けない、横糸としての側面、山野河海やアジール的な場所に残された大きな権力と異なる秩序

  Cf.制度や体制だけでなく人的コネクションやネットワークで成り立つ中国社会、日本の惣、連、組、講、座など

網野以後の歴史学の状況

- 戦後日本史学の見直しの提起
- 歴史を統一的に説明するような理論が見いだせない状況
- 歴史のありようを示す概念や法則が外されてしまい、細かい状況の叙述に変わってしまう

経歴の特徴

- 実家は山梨県を地盤とする地主で、資産家。親戚からは政財界に人材を出す。幼少期より父の事業などで上京し東京で育ち裕福な家。父の結核療養のため祖母と接することが多かった。

- 旧制東京高等学校は改正高等学校令に基づき1921年に設立された日本初の官立七年制高校。のちの東大教養学部や東大教育学部附属高校、中学校の前身。イギリスのパブリックスクールを模したスマートな校風で東京帝大への進学率は8割に達し、各界に多くの人材を輩出した。

- 戦後の学生運動や共産主義運動への熱中と脱落

- 東大の史料編纂所で文献を読み込む

- 学会の主流との距離

東京高等学校

民俗学との関係

- 渋沢敬三の設立した日本常民文化研究所月島分室に勤務、全国から収集した漁村の資料の整理にあたる。研究所は後に網野の勤務する神奈川大学の附属機関となった。後に古文書返却をライフワークとした。

- 義兄が同郷の民俗学者中沢厚。現代思想や文化人類学の中沢新一は義理の甥。

渋沢 敬三(1896 – 1963)
日本銀行総裁、大蔵大臣など歴任。子爵。祖父は渋沢栄一。民俗学に傾倒、発展に寄与した。

国民的歴史学運動

- 日本共産党所感派の武装闘争路線と歩調を合わせて「国民的科学の創造と普及」を目指して行われた、民族主義、政治主義、啓蒙主義的な歴史学と大衆運動の分野で行われた諸活動

- 国民的歴史学運動に参加し山村工作隊を指導し、督戦隊としての役割を果たす。多くの仲間の人生を変えたことの後悔が後の生き方に大きく影響した。

日本共産党33周年記念式典。同時に行われた日本共産党第6回全国協議会で武装闘争路線が総括された。

網野善彦の原点（1）

　自らは真に危険な場所に身を置くことなく、会議会議で日々を過し、口先だけは〝革命的〟に語り、〝封建革命〟〝封建制度とはなにか〟などについて、愚劣な恥ずべき文章を得意然と書いていた、そのころの私自身は、自らの功名のために、人を病や死に追いやった〝戦争犯罪人〟そのものであったといってよい。

　それから現在までの四十余年間の私の人生は、自己を全く見失っていた約四年間をきびしい〝反面教師〟としつつ、二度とそうした誤りはくり返すまいという一念に支えられてきたといってよい。当初はなにが将来に生れてくるのか、全くわからなかったし、また、積極的に声高な発言をする意志も皆無であったが、一つ一つの仕事、一通一通の文書を大切にするような姿勢だけは崩すまいという決心は固く持ちつづけていたつもりである。

『戦後を語る』 岩波書店 1995年

網野善彦の原点（2）

なぜなら「百姓＝農民」という常識の誤りが明白になり、前近代の日本社会が人口の八―九割を農民の占める農業社会であったという通説も、全く根拠のない「神話」だったことが判明した以上、封建領主による農民の支配関係を基本に置いて展開されてきた封建社会論は、いまや根底から再検討されなくてはならないからでる。・・・そしてこの道が、否応なしに戦後の歴史学の築いてきた日本社会像の枠組を徹底的に再吟味する課題につながっていたことを、いまようやく私は自覚しつつある。それは恐らく・・・近代史学の再検討にまで進まざるをえないことになろう。

『戦後を語る』 岩波書店 1995年

おわりに

- 網野善彦は日本史学の常識を覆し、日本社会の歴史像に変化をもたらした。
- 様々な出来事や人との出会いから、様々な問題意識が生まれた。
- 網野の創造性には自身を含めた観念論を批判し、資料を徹底的に読み込む実証主義により問題を乗り越えようとした地道な努力が関係する。